

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏 名 脇田 道子 君

論文題名 モンパの民族表象と伝統文化の動態に関する文化人類学的考察
—インド、アルナーチャル・プラデーシュ州を中心として—

審査担当者

主 査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
文学博士

鈴木 正崇

副 査 慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
社会学博士

関根 政美

副 査 慶應義塾大学経済学部教授・大学院社会学研究科委員
Ph. D. (ロンドン大学)

神田 さやこ

本論文はインド北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州に居住するモンパ (Monpa) と呼ばれる人々の集団形成や文化の様相を多様な視点で考察し、アイデンティティが模索される動的な過程を、2003年以來、合計13回、延べ14ヶ月に及ぶ現地調査に基づいて明らかにしようとした。これまで殆んど研究が進んでいなかった地域に関する貴重な資料と考察が含まれる優れた論文である。

論文の構成は以下のようである。

第1章 研究の目的

第1節 研究の目的

第2節 先行研究の概観

第3節 研究方法

第4節 論文の構成

第2章 調査地の概要

第1節 人と風土

第2節 歴史

第3節 モンパとは誰のことか

第3章 民族表象としての衣服

第1節 はじめに

第2節 エスニック・シンボルとしての衣服

第3節 モンパ女性の民族衣装

第4節 新しく取り入れた民族衣装

| | |
|-----|------------------------------------------------|
| 第5節 | 貫頭衣という共通衣服 |
| 第6節 | 腰当て布が表象するもの |
| 第7節 | 民族衣装の行方 |
| 第8節 | おわりに |
| 第4章 | 伝統文化と現代—タワン県を中心に— |
| 第1節 | チベット仏教文化の定着—タワン僧院のトルギャ祭とドンギユル祭— |
| 第2節 | 国境をまたぐ民俗儀礼の現在(いま)—ヤク・チャム (g. yag ‘cham) の事例から— |
| 第3節 | 伝統工芸の行方—モクトウの紙漉きの事例から— |
| 第5章 | 言語とアイデンティティー—ボーティ語教育とモン自治要求運動を事例として— |
| 第1節 | 北東インドとラダックにおける言語と自治地域要求運動 |
| 第2節 | ボーティ文字、ボーティ語教育と第8附則要求 |
| 第3節 | 文字の創造 |
| 第4節 | 自治地域要求の目的と運動の経過 |
| 第5節 | 大規模デモとさまざまな反応 |
| 第6章 | シャングリ・ラへの挑戦—国境地帯のツーリズムの現状と課題— |
| 第1節 | はじめに |
| 第2節 | 観光人類学の視座 |
| 第3節 | インナー・ラインとマクマホン・ライン |
| 第4節 | 観光の現状 |
| 第5節 | 聖地とツーリズム |
| 第6節 | 政治とツーリズム |
| 第7節 | まとめ |
| 第7章 | 結論 |
| | 参考文献 |
| | 資料Ⅰ～資料Ⅲ |

第1章では、モンパの概要を述べ、先行研究を検討して、本論文の研究主題を提示する。モンパとはヒマラヤ山脈の南麓一帯の地名であるモンユル (mon yul, モンの地) に住む人びとを意味する他称に由来する。チベットに居住する人々からみるとモンパとは「南あるいは西の山岳地帯に住むインド人でもチベット人でもない蛮族」という内容を含意する。モンパと総称される人々は、現在ではインド、ブータン、中国(チベット自治区)の3ヶ国に跨って住む国境地帯の民族集団となった。国民国家の成立によって否応なく政治の変動に巻き込まれる宿命を持つことになった人々である。

本論文の対象はインドのアルナーチャル・プラデーシュ州に居住するモンパを主とし、インド独立後は憲法によって、教育、雇用、議席などの優遇政策を受ける行政的な範疇である「指定トライブ」(Scheduled Tribe)に組み込まれた人々である。多様な自然環境のもとに生きるモンパは変化に富み、ある程度の言語の共通性はあるものの、書き言葉を持たず、標準語はない。しかし、現在は、同じ民

族衣装をまとい、チベット語教育やモン自治地域を求める運動を、トライブ集団として進めている。本論文はモンパとしての共通のアイデンティティが、インドの統治下で、徐々に形成されていく過程を、歴史的背景を考慮しながら現地で収集した資料に基づいて明らかにしようと試みる。

研究方法に関しては、民族・エスニシティ・エスニック集団についての文化人類学の理論の流れを整理し、インドにおけるトライブ（部族）の特殊性とその定義の難しさを検討している。北東インドやアルナーチャル・プラデーシュ州、そしてモンパに関する先行研究は、イギリス植民地時代の不十分な記録と、第二次世界大戦後のトライブ政策の展開による記録と考察はあるが詳しい研究はされていない。その理由は国境紛争地だからである。中国は1914年に当時のチベット政府とイギリス領インドの間で取り決めた国境線であるマクマホン・ラインを承認せず、アルナーチャル・プラデーシュ州のほぼ全域の領有を現在も主張し続けている。現在はインド側の実効統治下に置かれているが、係争地のため外国人の立ち入りは極度に制限され、入域には特別許可が必要で、滞在期間も短期しか認められない。本論文は先行研究の難点を乗り越えるために、短期ではあるが、現地調査を断続的に繰り返して、現地の人々との信頼関係を維持することで、モンパ研究を新たに構築し直す試みを行った。

第2章は調査地域の歴史・地理・文化の概要を述べる。本論文が対象とした西カメン県とタワン県の二県は、チベットやブータンとの歴史的関係が深い地域で、1681年にタワン僧院が建てられて以来、チベット仏教のゲルク派の根拠地となった。チベット人とモンパは支配者に対する被支配者の関係に組み込まれ、現在もチベット文化の影響が色濃く残る。ただし、現在のモンパは州内の多数派で非仏教徒のトライブの人々と対抗意識を持ち、彼らを「野蛮人」の意味をこめてロバ(Loba)やギドゥ(Gidu)と陰で呼ぶ。現地のモンパは自分たちを「チベット人ではないが、ロバやギドゥでもない」と意識している。彼らのエスニック・アイデンティティを考える出発点となる重要な意識である。1962年には未確定の国境を巡って中国とインドは局地的に交戦し、モンパの居住地が戦場となり、紛争後、チベットとの国境が封鎖されて、モンパのインドへの帰属意識が高まったという。また、同系統の人々が東ブータンに居住しており、相互の交流も文化の維持と変化に影響を与えていることが指摘された。

第3章はモンパ女性の民族衣装に焦点を当て、隣接あるいは混住する他のトライブとの差異化の表象としての機能や、ローカル・ポリティクスを展開している状況を考察する。インド側とブータン側のそれぞれで、聞き書きを行い過去の記録と照合することで変化の状況が明らかになった。地元で手に入る羊毛製の貫頭衣を着ていた人々が、ブータンやアッサムからもたらされたエリ・シルク（野生絹）をラック・カイガラムシの分泌液から作られる染料で染めた糸で織って、臙脂色の貫頭衣に仕立てて着るようになった経緯が明らかにされた。モンパと呼ばれる人々は現在では共通した衣服を着ているが、元々は衣服には強い統一性がなかった。現在見られるような統一的な民族衣装が広がった時期は、20世紀の半ば、つまり、支配がチベットからインドへと転換する時期だったという。1947年のインド独立後にこの地域は正式に統治下に再編成され、支配の過程で貫頭衣を着た人々が「指定トライブ」のモンパと名づけられた。この激動の時代にあって民族衣装が集団内の差異を隠蔽し、アイデンティの同一性を表象する機能を果たすことになったと推定されている。他方では、隣接する少数派の非モンパ集団の白い貫頭衣の場合は、モンパとの衣服を巡る文化的なヘゲモニーの主導権争いの過程があったことも想定される。また、モンパだけがつける腰当て布の重要性が述べられ、現在では

アイデンティティの表象として強く意識されるなど衣服の持つ表象の機能が浮き彫りにされている。

第4章では、タウンのモンパの中で伝統文化として認識されている三つの要素を検討して、各々を定着、衰退、継続の側面から論じる。第一は寺院の祭礼で、タウン僧院で毎年チベット暦11月に開かれるトルギャ祭と3年に一度のドンギユル祭である。3日間にわたり繰り広げられる仮面舞踊の内容を詳細に報告し、仏教の教義を人びとに可視化させる民衆教化の色合いを色濃く持ち、チベットとの関係が断絶しても仏教伝統は完全にこの地に根づいてきたことがわかる。細かく見ていけばタウンの地域性が維持されつつ変化してきたことが判明する。第二はヤク・チャム（ヤクの仮面劇）という口頭伝承に基づいた民俗儀礼で、モンパの伝統芸能ともいえる。本論文では、様々な由来譚を文献と聞き書きの双方から紹介し、ギャンカル村で実際に演じられたヤク・チャムの内容を検討する。生活文化として維持されてきた民俗儀礼が次第に「舞台上のショー的パフォーマンス」に変容してきた状況が検討されている。第三は紙漉きの伝統である。ジンチョウゲ科の植物の鞣皮^{じんぴ}を材料とした紙の製作が、小規模な手作業による抄紙として継続し、村落の互助システムとブータンの寺院からの需要という二つの力学によって支えられてきた。大量の紙が民間信仰の儀礼に必要であったことと結びついてきた。モクトウ村の8軒の紙漉き小屋での2003年以降の聞き取り調査により実態が明らかになった。モンパの伝統文化の三つの文化要素は東ブータンとの関係を維持することで支えられてきたことの指摘も重要である。モンパの伝統文化が次第に自覚され見直されてアンデンティティ形成に繋がっていくと共に、国境を越えた東ブータンとの人的交流や文化の変容の実態が明らかになった。

第5章は言語教育と自治要求運動を考察する。近年の新しい動きとして、モンパの僧侶、政治家、知識人によるボーティ語（チベット語）の言語教育の推進運動がある。モンパのエリートたちは、あえて母語ではないチベット語を共通言語にしようとする文化運動を通じて、自らの独自性を強調しようとしている。要求する言語もモンパ語ではなく、ボーティ語という。モンパには標準語にあたる言語がなく、文字もないにもかかわらず、仏教徒としての共通のアイデンティティを構築するためにチベット語教育を要求したのである。また、エリートたちは言語教育運動と共に、自治地域の要求運動を起こしている。アルナーチャル・プラデーシュ州はインドでは自治地域を要求できる憲法の第6附則の適用除外地域であるにも拘わらず、あえて自治地域要求を展開している。この運動はモンパ以外の人びとや運動に加わらない人々との間に齟齬を引き起こした。言語と自治に関わる動き、特にボーティ語公用語化運動は、州内では排斥運動の対象とされるチベット難民や、北西部のチベット仏教の担い手であるラダックの人々などと協力するなど、インド国内の他の地域のチベット仏教徒と連携を組むネジレ現象を起こしている。他方、モンパの自治地域の要求は、2004年に州議会を通過したが、他のトライブであるニシの学生組織による反対デモが行われ、その後、州政治でのトライブ間の勢力争いなどが起きて下火になった。2013年にモンパの自治地域要求運動が再開されたが、他県のトライブからは「州を分断するものだ」との反発の声がある。言語や自治という国家を相手にした要求の場合、我々意識を持ったトライブ集団や民族集団という単位が必要になる。この二つの運動は、行政上の他称としての「指定トライブ」のモンパが、時間の経過につれて、共通のアイデンティティをもった「モンパという民族」になることを目指すことの現われである。全体の動きはいまだに流動的だが、国家や州内におけるエリート主導による、自らの存在の再定位を図る運動が活発化している。

第6章は仏教文化を資源化しようとする州の観光開発の現状と課題についての考察である。インド国内でも開発が遅れた地域の一つであるアルナーチャル・プラデーシュでは、「豊かな自然」と「文化的多様性」を目玉にした観光を資源として、雇用を創出し、経済発展の手段とすることが期待されてきた。しかし、中国との係争地であり、イギリス植民地時代から引き継いだ負の遺産ともいべき様々の障害がある。2012年に世界的な旅行ガイドブックであるロンリー・プラネットによって、アルナーチャル・プラデーシュが「最後のシャングリ・ラ」というキャッチフレーズで「2012年に旅行したい地域トップ10」に選ばれた。しかし、ホスト側の州の観光への取り組みに関しては、インフラの未整備、特別許可を必要とすること、政府による観光宣伝の未成熟、村落観光の限界、官製イベント祭礼の無計画さなど多くの問題点が指摘された。「シャングリ・ラ」という仏教聖地をイメージさせるキャッチフレーズとは裏腹に、自文化を客体化できず資源を生かきれていない実態が浮かびあがってくる。また、州内でのトライブ間のコミユナルな争いが表面化し、水力発電や汚職に対する反対運動が活発化している。政治的には、バングラデシュからのチャクマ難民の排斥運動や、隣接するナガランドやアッサムなどとの経済格差や政治問題も抱えている。「シャングリ・ラ」イメージは、可能性と限界性を共に浮き彫りにする外部からの強い働きかけであり、今後の展開が注目されるという。

第7章では、本論文の全体が個別の独立したテーマを扱っているため、各章の内容を章の流れに沿って総括して関連付けている。かつて総称だったモンパが、行政上はインドの「指定トライブ」となって実体化し、同じ衣服を着ることで、次第にモンパとして統合されつつある。1962年の中印国境紛争後からインド化が進行したが、伝統文化に関していえば、その影響は直接的ではない。しかし、ヒンディー語教育によって母語を話せない若い世代が増えて口頭伝承を継承することが難しくなる状況が生まれている。現在、モンパのエリートたちが率いている言語教育や自治要求運動は、異なる言語をもつモンパをチベット仏教の下に統合し、行政上の名づけであるモンパからモンパという「民族」になる過程と捉えられる。ただし、自治要求には他の集団からの反発もあり、トライブ間のコミユナルな対立を生む可能性もあり、観光化の現状をみてもある程度予測することができる。モンパがインド国民になってから60年あまり経った。同じ衣装を着ている言語や地域の異なるモンパの間に「われわれ意識」が徐々に生成されつつある。しかし、現在は流動的であり、進行中の言語教育と自治要求に一般の人々がどのように関わっていくかで今後の状況への対応が変わっていくであろうと結論づけている。今後は、モンパ内部の各言語集団と他の人たちとの境界がどのように設定されているかという、よりミクロな部分に焦点を当てて緻密に資料を収集して考察することを課題としている。

巻末の資料Ⅰには、チベットとの自由な往来が可能だった時代にチベットとアッサムを結ぶ交易や中印国境紛争時の体験談などを11例収録している。いずれも今まで出版されてきた資料には出てこない地元の人びとの生の声である。資料Ⅱは、第3章で民族衣装の変化を論じる根拠となった人びとの証言例、資料Ⅲは、第4章のヤク・チャムに関する補足資料で、いずれも貴重な生資料となっている。

本論文はこれまで十分な研究蓄積がなかったインドのアルナーチャル・プラデーシュ州のモンパに関する初めての本格的な文化人類学的考察であり、参与観察を通じての詳細な考察によって、北東インドのトライブ研究の空白を埋める役割を果たした。内容は民族衣装、伝統文化、言語教育と自治要求、ツーリズムなど異なるテーマを設定した独立性の強い論文から構成されているが、各章の内容は

相互補完的であり、一貫して読むことでモンパという集団の生成の過程の総体を浮かび上がらせる仕組みになっている。本論文の評価すべき点は以下である。

第一は先行研究が不十分であったモンパの居住地域を広く歩いて細かく観察して聞き書きをとり、実証性に基づいた多面的な研究を展開したことである。モンパを取り巻く歴史的背景は複雑で、インド・中国・ブータン、或いはチベットやアッサムなど、関係・対立・融合を相互に繰り返しつつ、国家や地域の経済・政治・社会・宗教が複雑に絡み合う状況にあった。こうした流動性に富む状況を話者との会話や資料の発掘によって丁寧に把握し、モンパが単線的に変化したのではないことを明らかにした。考察の対象としたのは、衣装や仮面などのモノ、祭りとパフォーマンス、神霊と交流する儀礼、モノ作りとしての紙漉き、エリートによる標準語創出と自治要求運動、観光開発の実践など多岐にわたるが、個々の事例の文脈を民族表象と伝統文化の動態という主題で読み解き、エスニシティの動態を描き出すことに成功した。

第二は歴史学と人類学を融合させた新しい方法論の導入である。近年のグローバル・ヒストリーなど歴史学の新しい潮流や、グローバル化を取り込んだ文化人類学では、国家や地域の境界を超えた移動や移住に研究の焦点が移ったが、本研究は移動と定住の狭間を生きるモンパの特性を生かした均衡のとれた研究になった。モンパの住む土地、モンユルは、ヒマラヤ山脈の南麓の文化と社会の回廊であり、モンパは境界空間を生きる人々であった。モンパは多様で変化に富んでいて、強い統合力や凝集性を持った民族集団ではない。外部から「指定トライブ」の枠組みが与えられて徐々に「トライブ集団」として生成してきた。こうした状況を本質主義よりも構築主義・道具主義の立場で考察することで、集団とカテゴリーの狭間に生きる実態がよく描かれている。

第三は「モンパと呼ばれる人々是一个の民族として生きているのか」という問いに対して様々の可能性が示されたことである。モンパは交易の民としての流動性を根幹に持ち、多文化・多言語・多民族・多宗教の地域に生きてきた。決定的な方向転換は、植民地時代の残滓を纏う「指定トライブ」というインド政府の政治的枠組みが導入され、さらに国境紛争地域という政治条件が加わることで、困難な状況を乗り越える試練を通じて「自分たちは何者なのか」が問われた。その結果、現在の事点では、モンパの伝統文化の形成と民族の一体化はさほど強力ではない事実も明らかになった。本論文は単なる「民族集団」論でもなくエスニシティの議論にも収まらない新たな研究課題の可能性を示した。

第四は「周縁」と「中心」の重層性の中を生きる民、モンパという研究上でもかなり難しい課題に果敢に取り組んだパイオニア精神を評価したい。モンパは国家の「辺境」にあって、「多重的周縁」の中で生きて来た。モンパはインド、ブータン、中国という国民国家のいずれにおいても周縁の「辺境の民」であった。また、それぞれの国の中ではマイノリティであり続ける。従って、モンパを通して「辺境からの眺め」として複数の国民国家のあり方を同時に問い直し、近代とはいかなる時代であったかを考える、絶好の座標軸になりうる。その可能性は論文の中に埋め込まれている。

一方で残された課題も多い。第一は「地域」の捉え方である。独自の「地域」であった北東部インドは、植民地期には「帝国の辺境」化として捉えられるようになった。19世紀半ばに「ベンガル」や「アッサム」という地理的概念が作られ、そこからはじかれたり、含まれたりする過程で、更なる「辺境」化が生じてきた。中国側では、チベットの「辺境」化が起こり、その先の「辺境」

化の中にモンパが浮上する。こうした絶え間ない「辺境／境界」の創造の連鎖の結果として生成された人々がモンパなのである。単なる「民族集団」のアイデンティティ形成の動態だけで捉えるのではなく、「地域」の再定義が求められるのではないか。国民国家を無化するゾミア Zomia (van Shendel) や「最後の non-state 空間」 (James Scott) という概念が示唆的である。

第二は「交易」についてである。インド側のモンパは交易や祭りを通じて東ブータンとの強い結びつきを現在も維持し続けている。また、シッキムを通じて中国製品が流入し、アッサムのウダルグリの市という商品流通の拠点近くがあり、広域にわたる交易ネットワークがこの地域に存続してきた。国境を越えたつながりの継続は何を意味するのか。交易、一般化すれば交換の機能が、国家の境界やナショナリズムを超えて、民族集団とは別のネットワークを出現させている。「交易」の観点から伝統文化の動態を見直せば、別の見方も可能になったかもしれない。

第三は「チベット文化」の連続性と非連続性についてである。西カメン県のタワン僧院からのチベット人の撤退は 1951 年で、長期に亘るチベットとの関係に一旦、終止符を打った。これによってチベットの圧政にあえぎ、重い税負担に耐えていた時代は終わったという理解は本当に正しいのか。タワンの人々はアッサムやチベットとの交易の担い手で、ラサ政府にも優遇されていた。モンパ社会の中に深く浸透したチベットとの関係性を探れば、インド側のトライブに関する考察を、チベット側から相対化して、伝統文化の動態をより深い次元で把握できるかもしれない。

第四はエリートと民衆の思考や実践に関するズレの考察が十分ではないという点である。政治的・文化的エリートは自らの社会的地位の向上のために、言語教育や伝統文化の構築を推し進めようとするが、民衆の間ではさほどの共感を呼ばない。観光開発の前提となる文化の資源化や客体化の展開も支持されず、資本の投下は汚職と結びつき、基盤整備が出来ない。エリートたちの創造・想像する伝統文化と、一般の人々の日常生活の生活様式としての文化が一致せず、伝統の捉え方や今後の対応も異なる。民族形成におけるエリートと民衆の擦れ違いを強調すれば、文化の動態の考察はより深まる。

第五はアルナーチャル・プラデーシュ州の地域調査の限界かもしれないが、本論文は特定の村落で長期に亘って暮らすことで得られた成果というよりは、個別の主題に関する研究という印象が強い。国境紛争地であるために一般人、特に外国人は立ち入りや長期滞在が難しい。そのためにモンパの社会構造の考察が不十分で、論考としては社会の変化よりも、民族論や伝統文化の生成の方に比重が高い。インドと中国に挟まれた地帯での地政学上の重要性を鑑みると、西欧の植民地化、チベット化とヒンドゥー化、インド化と漢化のせめぎ合いがあり、近代化がこれに絡むという構図も考えられるのではないか。モンパの民族表象の形成に与えた影響をより大きな枠組みで把握することも課題である。

本論文は、以上のような問題点や課題を残してはいるが、民族やエスニシティ、伝統文化の生成と展開の研究に関して新たな領域を開拓した独創的な業績として、博士（社会学）学位の授与に値するものと判断する。

